取材：RING編集委員

種苗会社としてその先に見据える環境保全

タキイ種苗株式会社

京都市に本社を置くタキイ種苗株式会社は、江戸時代後期に創業。2025年で190周年を迎えます。永年にわたり培われた野菜や花の品種開発・改良技術により、高品質な種苗の安定供給を続けるとともに、農園芸資材商品を幅広い顧客に提供することで、日本の食と農業に貢献してきました。また国内のみならず、海外にも多数拠点を置くリーディングカンパニーとして、SDGsに向けた幅広い取り組みが積極的に行われています。

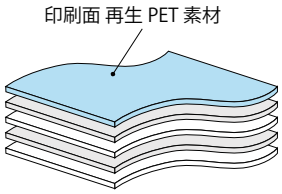
包装資材を通じて取り組むSDGs

タキイ種苗株式会社では、”脱プラスチックの時代”を見据え、SDGsにおける17の目標のうち「カーボンニュートラルの実現」と「プラスチックごみの減量」目指して、2018年より環境に配慮した新規包装資材への移行が検討されてきました。具体的に変更に向かった経緯としては、SDGsに取り組んでいた会社の方針と、包材メーカーより出された提案のタイミングが合致したことから始まります。袋・容器の素材は、品質維持への影響が多大なため、実現までには相応の手間と時間を要します。

加えて、商品として取り扱うタネは生きものです。それを守る包装材は、顧客の手に届くまで、バリア性、特に防湿性が重要となります。素材の検討に半年、製造ラインでは約1年の検証を経て、2022年の秋まき用のタネよりパッケージ全規格（国内販売商品）の素材の一部で、「リサイクルPET」と「バイオマスPET」2種類の採用が決定しました。これによって、石化由来素材の使用量削減、プラスチックごみ量の削減につながる成果を得ています。

通常より、袋は数種類の素材を重ねて層にしたものが使用されていますが、この中で、従来プラスチックだった部分を再生PET素材に変更。厚さの仕上がりや耐久性などに検証を重ね、印刷面では全商品をチェックして、ようやく商品化に至りました。また、これまではプラスチックボトルの容器で販売していた製品においても、バイオマスPET素材を使用した袋に変更したものもあります。

現在では約750品種のパッケージで再生PET素材が利用され、PETボトルリサイクル推奨マークを登録しています。これにより「バイオマスPET」ではCO_2排出量を約10％削減、「リサイクルPET」では約24％の削減を実現し、重量では約3万トンの再生PET素材が使用されています。



袋の素材イメージ

ロール状で包材メーカーより納品される製袋

持続可能な社会の実現に向けて

よいタネからは万倍の収穫が得られるが、逆に悪いタネをまけば、その損害は計り知れないという意味で「一粒万倍」という言葉があります。タネは見た目ではどれも同じ顔をしているので、まいて、育って、収穫の時が来て初めて、満足してもらえます。そのため、品種の開発・品質管理もより高い精度が求められ、信頼を得るための努力は必要不可欠です。そしてそれは自然環境への貢献も同様であると考えており、SDGsに向けて部門部署などが主体的に取り組みながら、全社的に推進を続けています。

現状の課題点は、製造時に出てしまう部材のロスが挙げられます。その対策として、ロスとなった部材の再生や、袋・容器の素材を単一化するなどを新たに検討しています。今後も、持続可能な社会の実現に向けて、種苗会社としての役割と責任を果たしていきます。

（取材日：2024年1月26日）

（左から）足立氏、北尾氏、丹羽氏、寄能氏

商品管理部 次長　寄能 靖夫
同部 課長　足立 洋輔
同部 チーフ　丹羽 駿介
同部　北尾 親彦

タキイ種苗株式会社

本 社：京都市下京区梅小路通猪熊東入
創 業：1835（天保6）年
創 立：1920（大正9）年5月19日
社 員：794名（2023年4月現在）
URL：https://www.takii.co.jp